

言葉を科学する：人間の再発見

Day 4 ちよっただけ feedback

とてもよい質問やコメントが毎回たくさん書かれています。全てに答えることはできませんが、全体へ feedback するのがよいと思われるものの一部だけ。授業全体の理解を深めるためにも、時間を見つけて必ず目を通しておいください。その上で、さらにたくさんコメントや質問に挑戦してください。そのような姿勢が一層理解を深める助けになります。

・Q：外国にもしりとりのような言葉遊びはあるのでしょうか？

***A：とても興味深い質問ですね。ぜひ、調べてみてください。その際に、その言葉遊びはその言語のどのような言語的特徴を利用しているのかを日本語のしりとりと比べてみると、おもしろいでしょう。日本語のしりとりは、単語の音韻的特徴と品詞の区別などを（無意識のうちに）利用していますね。**

・Q：「単語を知っている」と言えるためには、どこまで知っていればよいのでしょうか。読み方をしっていればよいのか、意味を明確に把握していればよいのかなど、学説上一般的な定義あれば教えて欲しい。・単語を知ってるという時、英語の場合一つの単語がさまざまな意味を持つことがあるので、その単語を知っているというのは、その単語の全ての意味を知っていなければ知っているといえないのでしょうか。

***A：自分の母語に関していえば、その単語の発音の仕方（方言的な特徴も含め）、形態的・文法的なふるまい方を無意識のうちに利用していますね。単語の意味も使っています。このタイプの言語学では、無意識のうちに自由に使っている（発話も理解も含めて）ことが、その個人が自分の言語能力の一部として「知っている」ということです。したがって、無意識のうちに使っている単語はすべて、（仮に他の人との使い方とは少し異なっている部分があったとしても）その人が知っている単語、ということになります。注意すべきは、人間ひとりひとりの頭の中の辞書ですから、当然ある程度の個人差はあるでしょう。場合によっては、自分が所属する言語コミュニティの多くの人たちとは異なる形で（発音の方法や意味）覚えて使っているという場合もありうるでしょう。それを「間違っ」覚えていたりとか、その単語の意味を「正しく」知らない、というのは、価値判断の入り込んだ考え方になる可能性があるので注意が必要です。**

・Q：子どもが自然とたくさんの単語を獲得していく能力・仕組みは、どのタイミングで失われてしまうのでしょうか。今では母語であっても無意識のうちに意味を考えるという作業はしていないように思う。

***A：とても重要な質問です。まず、ある程度の年齢以上になると、母語であっても無意識のうちに意味を考えるという作業は本当にしていないのか、ということを確認に客観的に確かめなければなりませんね。もしかすると、実際には大人も子供と同じことをやっているのかもしれない。子供と大人の違い**

は、新たに覚えなければならない日常的な単語が大人の場合のものすごく少ないので、そのような方法で無意識のうちに単語の意味を覚えていくということをやっていることに気が付いていないだけかもしれません。一方、もしある程度の年齢になると子供と同じような単語を獲得していく「能力・仕組み」が失われてしまうというのが本当のことであるとすれば、そのこと自体がとても興味深い研究対象となりますね。具体的には、そもそもそのような子供の「能力・仕組み」がどのようなものであるのかをしっかりと明らかにする必要があります（まだよくわかっていないことがたくさんあります）。その次に、どのようなタイミングでどのように失われていくのかを調査する、それらが明らかになってきたら並行して、そのような能力の衰退の理由・原因は何かを研究する、という段取りになると思います。

・Q: 赤ちゃんは雑音とことばをどのように聞き分けているのだろうか、という疑問をもちました。つまりこれは、赤ちゃんにとって「音と言葉の違いは？」という疑問にもなります。

*A: 素晴らしい質問です。「どのように」聞き分けているのかという問題は、生理学的にその仕組みを突き詰めていくのがとても難しいと思います。言語学的には事実として以下のことが分かってきています。新生児は、(i)人間の言語音とそれ以外の音を比べると、前者により興味を示す。(ii)自分の周りで話されている言語音（その子の母語になる）とそれ以外の言語の音を比べると、前者により興味を示す。つまり、人間は生まれた時から (A) 人間の言語音とそれ以外を区別する能力を持っている、(B) そして人間の言語音の方により興味を示すように遺伝的にプログラムされている、と考えることができます。大人でも、全く知らない外国語であっても、それが人間言語の一つであるということには、気が付くのではないのでしょうか。さらに、自分が全く知らない外国語の話者が、言葉以外の音声を口から発している場合（うなりごえ、さけびごえ、など）と、意味のある言葉を発している場合との区別も、かなりの確率でできるように思います。人は何が人間言語なのかということが無意識のうちに本能的に、ある程度知っているのかもしれない。

・Q: 「ガヴァガイ」のペアワークで、「ガヴァガイくん」であるという案がでましたが、これはものには名前（固有名詞）があるということを知らなければ成立しない思考回路なのでは、と思いました。

*A: とても良いポイントですね。固有名詞（一つ一つの個体に与えられる名前）という概念と「ウサギ」「トリ」などのより大きな種類としての名称という概念が、どのように区別されるのか、どのように身についていくのかというのは大変興味深い問題です。教室で行った「カヴァガイ」の実験だけでは、はっきりしたことは言えませんが、多くの人が「ガヴァガイ」が固有名詞であるという可能性にあまり気が付かなかったということは、固有名詞というのは、名詞の中でも特殊な概念なのかもしれません。自宅の犬が「く～ちゃん」という名前の幼児が、外で別の犬を見かけたときに「く～ちゃん！」ということがあるとすれば、それは固有名詞であるということを確認して理解していないことを示していると考えられますね。固有名詞という概念がきちんと身につくのは、発達の段階で少し後の方なのかもしれません。

・Q: 意味や機能を持つ最小の単位の形態素であるが、英語の形態素と日本語の形態素は本当に同質のものなのか疑問に思った。

*A: とても、大切なポイントです。まず、形態素の定義はどの言語に関しても同じです。そして、どのような意味・機能・概念が一つの形態素として具現されているかは、言語ごとに異なっているでしょう。動詞や名詞などの内容語に関しては、言語間でかなりの共通点があるかもしれませんが、文法的な機能を持つ形態素は大きな違いが出る可能性がある部分でしょう。たとえば、形容詞に付けてそれを名詞化

する接尾辞（束縛形態素）として、日本語には「～さ」がありますね。「大きさ」「悲しさ」など。そしてこの「～さ」はかなり生産的な接尾辞です（ほとんどの形容詞につくことができる）。英語にも形容詞つけてそれを名詞化する接辞がいくつかありますが、その中で-ness はとても生産的な接尾辞です。bigness, sadness などほとんど形容詞に付けることができます。この点では、日本語と英語がとても似ているともいます（もちろん、これらの形態素の発音は日本語と英語とで大きく異なります）。一方、英語には、たとえば、the とか a, an という形態素もありますが、これに直接ぴたりと対応する形態素（単語）は日本語にはありません。逆に日本語には「は」「が」などの助詞が重要な働きをする文法的機能を持った形態素ですが、英語にはそれらに直接ぴたりと対応する形態素はありません。外国語の学習が難しいのは、このような点にあるのかもしれませんがね。ただし、英語で the が含まれている文で表そうとしている意味内容を日本語で表すことができないというわけではないということに注意。あるいは日本語で「～は」が含まれている文で表そうとしている内容を英語で表すことができなというわけでもありません。（そうであれば翻訳は全く不可能になってしまいますね）